研究ノート

社会政策論におけるマルクスとウェーバー
―「本質論」から総合社会政策へ―

石　田　　伝

K. Marx and M. Weber in Theories of Social Policy

Tsutou Ishida

1　弁証法と因果論

エレアの学徒たちが運動を否定したとき，周知のように，ディオゲネスは反対者として歩みでた，彼はほんとうに歩みでた．つまり，彼は一言も口をきかずに，二，三度あちこち歩きまわったばかりだった．それだけで充分に彼等を反駁しえたと彼は考えたのである．キルケゴールは人生の弁証法的性格を示すために，このエピソードを名著『反復』の冒頭においた．

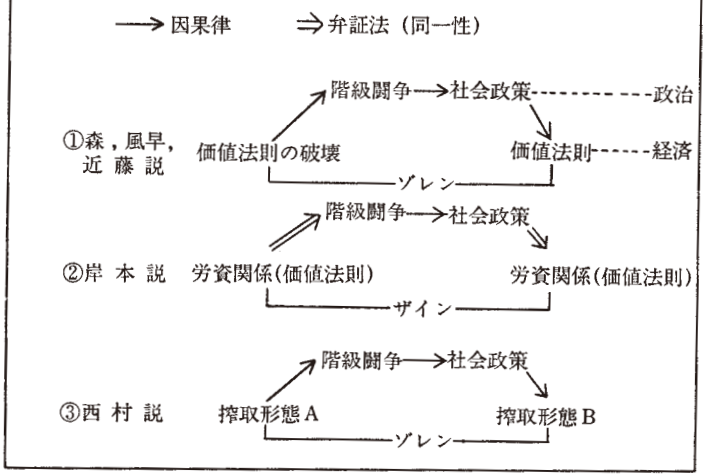
未知の出来事や意見に接した時，人はふつう何のことかよくわからない．しかし経験や検証を通して次第にその意味が明らかになる．理解は低い次元から高い次元へと進む．例えば，仏教の根本思想は「色即是空」という形で示されている．青年ならこれを「恋のはかなさ」程度にしか理解出来ない．しかし人生経験をかさねるにつれて，理解の内容は豊かになり，ついにはシャカと同じような高い哲学的境地に到達する．失恋からネハンに至るまでに人は無数の「色即是空」を反復する．その間に少しずつ人格の厚みが増して行く．同様の事柄は宗教にのみ限らない．科学や芸術，さらには社会の諸現象の中にも見ることが出来る．

社会政策の領域ではどうだろう．おなじみの「労資関係→春闘→労資関係」という事象系を例にとろう．これを「労資関係によって春闘が生じる」と因果論的に読むのは無意味なトートロジーである．なぜなら春闘も労資関係であって，労資関係が原因で労資関係を生じるというのは無意味なくり返しにすぎない．これは正しくは「労資関係は春闘に転化し，春闘は労資関係に転化する」と読まなければいけない．つまり労資関係という本質は同じままで現象形態が変化したと読めばトートロジーではなくなる．この本質と現象の相互転化が何度も反復されるうちに，本質である労資関係自体も次第に変化する．これが労資関係の弁証法で

ある．

社会政策の「本質論争」は，労資関係の因果論的理解と弁証法的理解の対立だった．その事情を簡単に示すために，「論争」に登場した代表的な学説の骨組みを模式化したのが第1図である．①と③は経済的原因を出発点とし経済的目標を

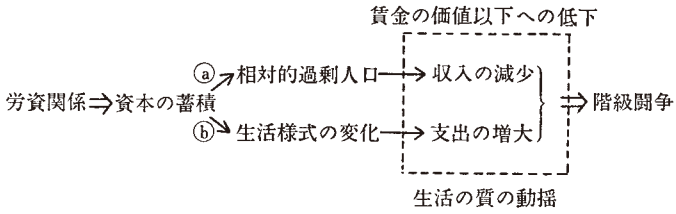
第1図　代表的社会政策論の構造



到達点とする因果系列である．これは出発点と到達点のカテゴリーは同じでも，事象が異なるからトートロジーではない．合理的因果系列である．ところが②は出発点と到達点が労資関係という同一事象であり，因果論的に理解すると，無意味なトートロジーになってしまう．したがって②を因果系列である①，③と同一視することは出来ない．一応弁証法的系列ではないかと考えてみる必要がある．補足的に述べると，③は労資関係を搾取形態の面からとらえるという特異な発想を示している．しかし，もし搾取の形態と同時に搾取の量（両者はメダルの裏表である）もあわせて考えると，搾取が原因で搾取を生じるというトートロジーになってしまう．③は因果系列としては不完全である．

残る問題は，②が弁証法的系列であるとすれば，その構造はどのようなものかということである．第2図はその仕組みをズームアップして示したものである．労資関係が労働過程と価値増殖過程の矛盾から出発して資本の蓄積に転化するルートは『資本論』からの借用である．さらに資本の蓄積が相対的過剰人口を生み

第2図　労資関係と階級闘争の弁証法（岸本説）



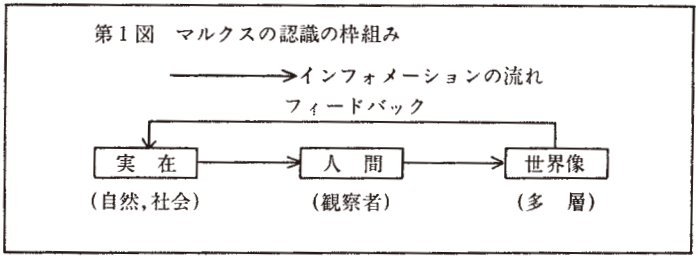
出す点も同様である．ここからマルクスにはない新しい論理が展開される．即ち労働力の供給過剰によって賃金は常に価値以下に低下するという論理である．「賃金の価値以下への低下」＝「収入の減少」によって，労働者階級の生活は窮乏し，体制への反抗や道徳的頽廃を生じる．これが階級闘争である．図からわかるように，この論理はⓐのルートだけをとりあげて，資本蓄積のもう一つの結果であるⓑのルートを見落としている．ⓐルートの「収入の減少」とⓑルートの「支出の増大」が，ともどもに労働者の「生活の質」を反復攪乱し，そのことが平穏な労資関係を緊張した労資関係である階級闘争に転化すると見なければ不十分である．ⓑルートを見落としたまま労資関係が経済の次元から政治の次元へ転化したので，次に政治の経済への転化（媒介環が社会政策）に際して，「収入の減少」に対応する社会政策（工場法，労働組合，社会保険，最低賃金制）のみがとりあげられ，「支出の増大」に対応する社会政策（社会保障の大部分，共同消費手段）が論理の枠からはみ出てしまった．「生活の質」が反復攪乱されることが経済の政治への転化のカギであることをあいまいな形でしか見なかった点で，②の弁証法はまだ不完全であった．

2　マルクスの弁証法的体系

社会政策論は政治（社会政策）と経済（価値法則）の関連を階級闘争を媒介にして理解しようとする試みだった．その際マルクス『資本論』が下敷に用いられた．しかし前節で見たように，その関連の論理は経済が政治を包摂した因果系列（経済決定論）であったり，弁証法的理解が行なわれた場合にもいまだ不徹底な

ものであった．その原因が何処にあるにせよ，一度マルクス，特に『資本論』の論理はどうなっているのか確かめておく必要がある．

第1図は，マルクスの認識の枠組みを示す模式図である．人間は実在する自然や社会からインフォメーションを受けとり世界像を作る．この世界像のインフ



第1図　マルクスの認識の枠組み

ォメーションが実在へフィードバックされる．このようなインフォメーションの循環が反復される間に次第に「世界像」は厚みを増し「実在」に近づく．「世界像」と「実在」は弁証法的に同一化するものと見なされている．マルクスの認識論は「弁証法的素朴実在論」である．そこではインフォメーション量の増大とそれに伴う世界像を構成するカテゴリーの質的変化が予定されている．単純な世界像から出発して，より豊かな世界像へと上向して行くのがマルクスの認識の弁証法である．では出発点である単純な世界像はどのようにして設定されるのだろう．

マルクスは資本主義社会の土台は経済過程であり，経済過程の細胞は商品であるという周知の有名な前提から出発して『資本論』の研究を行なった．この前提はヘーゲル哲学の批判や古典経済学研究の成果であるとはいえ，そのことが真である理由をあらかじめもつものではない．一つの仮定である．商品が経済の細胞である理由は商品交換の反復の中から貨幣が生み出されてはじめて明らかになる．さらに貨幣の存在理由は貨幣流通の反復の中から資本が出て来ることによって明らかになる．「商品」から出発して，弁証法的に「資本の蓄積」に到達する『資本論』の体系は，先行するカテゴリーの理由を後のカテゴリーが証明する後ずさりの体系である．

第2図は『資本論』(第1巻)の骨組みを示したものである．この図を見て『資本論』は商品から資本蓄積までの必然性を論証していると解してはならない．それでは弁証法の系列を因果系列に読みかえたことになる．『資本論』は商

第2図　『資本論』の骨組み

⇒ 弁証法（同一性）　⇢ 未完成部分

商品⇒貨幣⇒資本⇒剰余価値⇒資本の蓄積⇢恐慌⇢階級闘争⇢収奪者の収奪⇢
（貧困）　（貧困）

品が資本蓄積に転化する弁証法的根拠を示しているのであって，資本蓄積の理由は次のカテゴリーである恐慌が弁証法的に導出されてはじめて明らかになる．『資本論』では恐慌以降のカテゴリーは存在が示唆されているだけで，その弁証法的根拠はもちろん存在理由は何一つ論じられてはいない．それはマルクスの責任というより，弁証法自体の制約によるものである．弁証法的体系は証明の完結することのない，常に未完成の体系なのだ．

『資本論』では，貧困は剰余価値生産や資本蓄積に附随するものとして豊富な事例と言葉で述べられている．マルクスは貧困を剰余価値生産や蓄積と同義語と解しているといわれても仕方がないかも知れない．（因みに，労資関係，再生産が貧困の原因であると主張する説はトートロジーである．）しかし，図からもわかるように，貧困が存在する理由は恐慌や階級闘争の弁証法的根拠が明らかにされてからでないと出て来ない．マルクスはとりあえず貧困や階級闘争を事実としてとりあげざるをえなかった．貧困の弁証法は「価値以下説」によってはじめて分析の対象になったといえるだろう．

3　ウェーバーの因果的体系

次に紹介する寓話は「工場法」をめぐる著名な三つの見解をアナロジーしたものである．

最近地球上では抗生剤が大量に使われた結果，耐性菌が増加しています．UFOに乗ってやって来た三人の宇宙人がこれについて次のような会話をしています．皆さんはどの意見が正しいと思いますか．

A　抗生剤の使用は病原菌を殺すためだと思います．

B　いいえ，あれは病原菌を変質させるのが目的で，耐性菌を作っているのです．

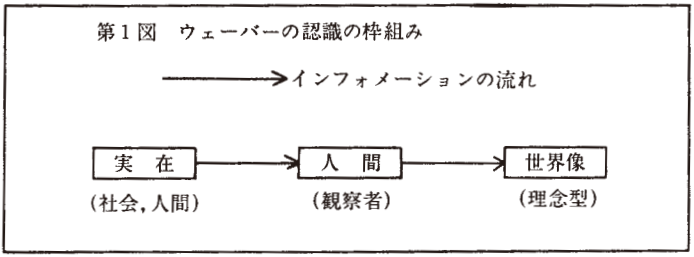
C　いやいや，単に耐性菌を作るためですよ．

後日談

やがてＵＦＯに帰った3人は宇宙博士に判定を求めました．宇宙博士は「理念型」を作って検討してみようといいました．

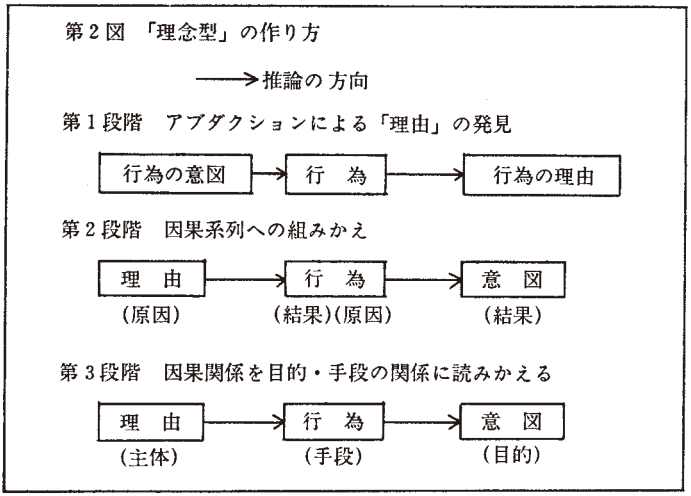
この寓話は人間の主体的行為に関する意味理解のむつかしさを示している．ウェーバーは観察者と人間の主体的行為を含む事象との間には越えがたい溝があると考えた．観察者は他人の行為の意図を正確に判断することが出来ないからである．先の寓話に見られる通り，同じ行為が三人三様に理解され，しかもそれぞれに妥当性をもつかに見える．このような時，客観的認識はいかなるものでなければならないか，これがウェーバーの課題であり，その回答が「理念型」だった．

第1図はウェーバーの認識の枠組みを示したものである．インフォメーションは人間（観察者）を通過する際にバイアスをうける．マルクスではフィードバック（インフォメーション量の漸次的増大）によるバイアスの解消が考えられている．ウェーバーの場合はインフォメーション量が一定なので，バイアスを直接見分ける方法が必要になる．その方法が「理念型」である．第2図は「理念型」の作り方を示したものである．まず最初に，行為の意図は「こうであろう」という「仮定」が置かれる．この「仮定」をもとに現実の「行為」が実証的に検討される．検討が進むうちにやがて行為の「理由」が浮かんで来る．このような推論の方法をアブダクション（Abduction）という．（弁証法も推論の形式はアブダクションである．）次に，第2段階として，これを行為に関する因果系列に組みかえる．最後に，この因果関係を目的・手段の関係に読みかえれば行為の必然性が理解出来ることになる．



第1図　ウェーバーの認識の枠組み

以上の手続に形式上の手落はない．問題は出発点である「行為の意図」が常に

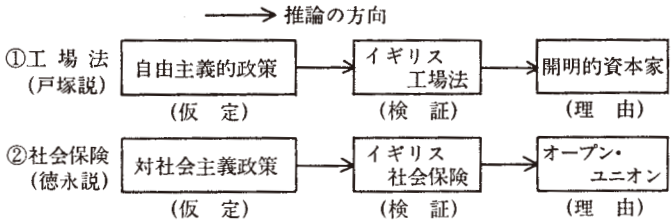


複数個考えられることである．したがって観察者は思いつくかぎりの「意図」を想定して，それぞれについて「理念型」を作り，複数の「理念型」を比較照合することによって漸く現実の模像が得られることになる．

ウェーバーにおいては世界像は「理念型」であり，常に現実と何程かの隔たりをもっている．しかも「理念型」の出発点である「想定された意図」は価値観の産物と解されているので，どの「理念型」が一番正しいかという判断は成り立たない．「理念型」自体は厳密な実証性をそなえているものの，現実は常にビニールの膜の彼方にしか存在しない．

第3図はウェーバー流の実証主義に立って社会政策を検討した事例の模式図である．いずれも「政策の意図」を価値基準とする「理念型」である．ところが，①，②の両説共，自らを「実在型」と考えている．そのために，自説と異なる政策理解はすべて誤謬であるとしりぞけてしまう．①，②が自らを「実在型」であるとする根拠は，政策の意図を想定する際にあらかじめ「経済学原理」で「実在性」が，検証してあるからということらしい．もしそうなら，「経済学原理」なるものが「実在型」である証明が必要である．いずれにしても，ウェーバー的社会政策論がもつ「実在性」は，ウェーバーが「理念型」を工夫した意図に反することは間違いない．

第3図　ウェーバー的社会政策論の事例



4　現代の「虚偽意識」と総合社会政策

マルクスは生産力と生産関係の矛盾という観点から，資本の蓄積が富と貧困の併存する社会不安のルツボを生み出すと述べて現代を予言した．一方ウェーバーは行為の意味理解という手続を経て，合理化が社会進化の原動力であると見た．それと同時に，合理化の進展はそれにとり残された人達をモッブ化するであろうと予見して現代を洞察した．

現代とは一言でいえば「新中間層」の時代である．「新中間層」とは現代における労働者階級の存在形態である．元来は「ホワイト・カラー」，「テクノストラクチュア」と呼ばれる専門・技術労働者，事務労働者の階層であったが，第三次産業の拡大や労働過程の精神労働化に伴い，一般労働者層をも包摂するようになった．「新中間層」は，彼等が抱く所有者意識や管理者意識によって古典的労働者像と際立った対照をなしている．労働者の意識を変えた原因は労働過程の変質と生活様式の高度化である．労働過程の科学・技術化，監視労働の増加は労働者にマネジメント労働を行なっているかのような錯覚を与える．また一方，住宅を含む大型消費財の取得は労働者に虚偽の所有者意識を抱かせる．「新中間層」が抱く所有者意識や管理者意識は現代の「虚偽意識」である(1)．現代の「虚偽意識」は資本とタイアップして職業や地位（ステイタス）にピラミッド型の格付けを行なう．労働者階級の成員は社会のピラミッドを登る機会を求めて不断の競争状態に突入する．競争は職場だけでなく家庭にも侵入する．家庭は性の調和

(1)　現代の「虚偽意識」については，庄司興吉『現代化と現代社会の理論』東京大学出版会，1977年，158ページを参照．

に基づくエデンの園から「虚偽意識」の培養基に転化する．意識が存在を規定するかのように，「虚偽意識」が労働者階級の行動を基礎づける．

現在国民の9割が中流意識をもち，カラーテレビの普及率や高校進学率もそれぞれ9割を超えた．日本も「豊かな社会」に仲間入りしたらしい．低所得層の広汎な存在は「島の貧困」とは，いえないけれど，年収100万円未満の人の半数近くが中流意識の所有者である事実は認めねばならない．現代社会はマルクスが予想した貧富の対立や，ウェーバーが予見した合理性と非合理性の対立を「虚偽意識」を媒介にして個々人の生活内容に転化させている．意識と存在の矛盾が個人をしめあげる．ドブ板を踏んでパリ見物に出かけるOLや，行きずりの子供を理由もなくなぐり殺す一流企業の社員の事例は極端であるとしても，誰しもが自分も似たような状況に置かれていることを感じてはいないだろうか．

総合社会政策の提唱は，現代の「虚偽意識」がもたらす諸弊害に，対処しようとするものと考えてもよいのではなかろうか．そこには従来の社会政策になかった意識面の調整が考慮されている．具体的には，かつて家族が担当していた生活の知恵（例えば妊婦や育児の心得等）の伝授や，教会の職務であった人生相談的役割を国家が行なうことを意味するのかも知れない．しかしいずれにしても，「虚偽意識」が虚偽である限りは問題は繰延べられるだけである．「虚偽意識」を虚偽でなくすことこそ総合社会政策の究極目標でなければなるまい．そのためには，先ず労働者階級の生活が均質化し，個々人の生活が安定と調和をとりもどす必要がある．職業やステイタスにかかわりなく，誰でも同じように安定した生活が営めるなら，人々は生存競争にかりたてられることもなくなり，競争がもたらす諸弊害も減少するだろう．労働者階級の生活の均質化を実現するための主体はやはり労働組合であろう．19世紀イギリスの職能別組合に見られたような集団で生活を守る習慣がより大きな規模で復活されねばならない．すでに労働組合と消費組合の結合にこれからの労働運動のあり方を求める試みもある(2)．

近代社会は旧社会の人間的紐帯を分解して，人間を個人に還元し続けた．還元された個人は現代では「虚偽意識」にのみ依存して生きる頼りない存在になってしまった．しかし，もし「虚偽意識」が今は奪われている物質的裏付けを獲得することが出来れば，そこには社会的連帯に基づく新しい人間生活が待っていると期待してよいのではなかろうか．

社会政策の研究者にとって，これからの課題はマルクスかウェーバーかという

(2) 荒又重雄『賃労働論の展開』お茶の水書房，1978年，216ページ，320ページ参照．

対立や選択ではなくて，現代の「虚偽意識」といかに取組むかということでなければならない．

（1979年1月17日脱稿）